

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：子どもが主役の博物館づくり事業

事業者名：三重県立博物館

住所：三重県津市広明町147-2

TEL：059-228-2283

FAX：059-229-8310

HPアドレス：<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/haku/>

連携事業者名：三重県博物館協会、三重県立博物館サポートスタッフ

会場：三重県立博物館、津偕楽公園、三重県総合文化センター

事業期間：平成22年5月24日～平成23年3月15日



1. 館の使命と本事業の関係

三重県では平成26年の開館を目標に新県立博物館としての整備を進めており、「ともに考え、活動し、成長する博物館」を新県立博物館の活動理念としている。新県立博物館では、県民・利用者との「協創」と多様な主体との「連携」により博物館活動を進めることをめざしているが、それは子どもたちが主体的に活躍する新県立博物館と県内博物館ネットワークづくりをめざそうとする本事業の目的と合致するものである。本事業において実施する実践的・試行的プログラムの取組を通して、未来を担う子どもたちが主役となり、親しみ、活用し、活動の拠点となる新県立博物館の整備と県内博物館ネットワークを推進することにより、博物館の使命の実現をめざす。

2. 企画内容

①事業目的

平成21年度に文化庁の支援を受けて実施した子どもたちを対象とするプログラムの成果を継承・発展させ、子どもにとって博物館はどのような場であるべきか、どのような役割を果たすべきかを考えるために、県内の博物館や県立博物館のサポートスタッフ等とともに博物館と子どもをつなぐさまざまな試行的取組を行うことにより、子どもたちが博物館の活動に主体的に参加できる仕組みづくりや、子どもたちの主体的な活動の場となる博物館環境の整備をめざすとともに、県内博物館とのネットワークづくりを進める。

②事業概要

子どもたちが主役となる博物館のあり方を探るために、(Ⅰ)子どもたちが博物館とはどのようなところかを知り、親しみをもつきっかけとなるワークショップの実践プログラム、(Ⅱ)子どもたちが地域の情報を調べて発表・交流する活動を通して、博物館活動のプロセスを体験するプログラムを実施する。そして、(Ⅰ)と(Ⅱ)を踏まえて、(Ⅲ)子どもが主役となる博物館について意見交換を行うことも会議や、博物館等関係者とともに考える研究フォーラムを開催するプログラムを行う。

これらの取組により、子どもが主役となる新県立博物館の整備と県内博物館ネットワークづくりを考えるための実践と開発の機会とする。また、それらの実施プロセスや成果を記録し、県内外に発信することにより、新県立博物館整備や県内の博物館に対する幅広い共感と理解、期待を促進する。

3. 事業実績

(1) 事業の内容及び日程

【プログラムⅠ】博物館きわめるプロジェクト

博物館のワークショッププログラムの開発と実践の分野で活躍されている講師を招き、サポートスタッフとともにワークショップの試行に取り組んだ。

①事前研修会

プログラムの実施にあたり、博物館やサポートスタッフなどの関係スタッフがワークショップのあり方について考える事前研修会を実施した。

講 師：染川香澄さん(ハンズ・オン プランニング 代表)

日 程：平成22年10月23日(土)

②展示って何だろう？

平成21年の「モノって何だろう？」に引き続き、今年度は「展示って何だろう？」をテーマに、2種類のワークショッププログラムを実施した。

1) 「ワクワク博物館のつくりかた」

子どもたちが公園を探索して、見つけた葉っぱや小石など、ワクワクしたものを「まほうのハコ（「ハコブツカン」キット）」の中に入れて一人ひとりのミニ博物館をつくるワークショップを実施。

講 師：塩瀬隆之さん(京都大学総合博物館 准教授)

日 程：平成22年12月5日(日)

※「ワクワク博物館のつくりかた」は、台風のため、当初予定していた10月30日(土)から12月5日(日)に日程を変更して実施した。



ワクワク博物館のつくりかた実施風景

2) 「ふでばこてらん会」

子どもたちがふでばこを持ち寄り、二人一組になり相手のふでばこの中身を調べあい、相手のふでばこを紹介するミニ展覧会をつくるワークショップを実施した。

講 師：佐藤優香さん(国立歴史民俗博物館 助教)

日 程：平成22年10月7日(日)



ふでばこてらん会実施風景

3) サポートスタッフ企画「正月飾りづくり体験ワークショップ」

2回のワークショップで得た成果を生かして、サポートスタッフが企画実施する「正月飾りづくり」を実施した。

講 師：渡辺 勇(三重県立博物館サポートスタッフ)

門口実代(新博物館整備推進室学芸員)

日 程：平成22年12月18日(土)

【プログラムⅡ】新博ティーンズプロジェクト おとなになっても残しておきたい

地域の宝・魅力をさがし出そう！

子どものグループが、博物館学芸員のサポートのもと、地域の宝や魅力についての調査を行い、その成果を発表し交流するプログラムを実施した。

①調査方法についての説明会

参加者に対して、調査の進め方についての説明を行った。

日 程：平成22年7月11日（日）

②グループの取り組み

グループごとにそれぞれのテーマについての調査
やまとめの活動を行った。

日 程：7月下旬～10月上旬

③成果発表・交流会

グループごとに調査成果を発表し、相互に質疑を
行い、交流を深めた。

日 程：平成22年10月17日（日）



成果発表・交流会実施風景

【プログラムⅢ】子どもが主役の博物館づくりプロジェクト
プログラムⅠとⅡの成果を踏まえて、子どもの主体的な
対話の場となる「こども会議」および三重県博物館協会と
の共催で「研究フォーラム」を開催した。

①こども会議

新博ティーンズプロジェクトや博物館きわめるプロ
ジェクトなどに参加した子どもたちが、新しい博物館
でやってみたことなどについて、大人とともに話し合
いを行った。

日 程：平成22年11月28日（日）



こども会議実施風景

②研究フォーラム「子どもが主役となる博物館づくりを考える」

子どもと博物館をつなぐ取組をされている講師を招き、博物館の関係者や関心のあ
る方々とともに、「子どもが主役となる博物館」をテーマとする公開の研究フォーラ
ムを開催した。

○講 演

塩瀬隆之さん（京都大学総合博物館 准教授）

○活動事例報告

鈴木有紀さん（愛媛県美術館 学芸員）

井島真知さん（林原自然科学博物館 エducーター）

嵯峨創平さん（NP0 法人環境文化のための対話研究所 代表理事）

平賀大蔵さん（海の博物館 学芸員）

○討 論

〔司会〕布谷知夫（三重県生活・文化部 顧問）

〔パネリスト〕塩瀬、鈴木、井島、嵯峨、平賀

共 催：三重県博物館協会

日 程：平成23年1月15日（土）

（2）参加者の数

【プログラムⅠ】博物館きわめるプロジェクト

・事前研修会	23名
・ワクワク博物館のつくりかた	19名
・ふでばこてんらん会	31名

- ・正月飾りづくり体験ワークショップ 16名

【プログラムⅡ】新博ティーンズプロジェクト

9グループ66名

【プログラムⅢ】子どもが主役の博物館づくりプロジェクト

- ・こども会議 子ども29名 大人63名
- ・研究フォーラム 82名

(3) 事業により作成した印刷物等

プログラムの実施プロセスや成果を効果的に発信し、博物館に対する認知度の向上や連携や交流を広げるために、21年度に引き続き、印刷物や映像情報の制作を行った。

《印刷物》

①博物館きわめるプロジェクトチラシ	85,000部
②新博ティーンズプロジェクトチラシ	130,000部
③こども会議チラシ	10,000部
④事業実施報告書	1,000部
⑤普及用冊子	10,000部

《テレビ番組の作成と放映》

プログラムの実施過程を取材して制作したテレビ番組（30分番組）を県内のケーブルテレビ9社で放映した。

放映期間：平成23年3月12日（土）～3月31日（木）

放映回数：のべ125回

放映会社：県内のケーブルテレビ9社

ラッキータウンテレビ、中部ケーブルネットワーク、
シー・ティー・ワイ、ケーブルネット鈴鹿、ZTV、
伊賀上野ケーブルテレビ、アドバンスコープ、
松阪ケーブルテレビ・ステーション、アイティービー

4. 事業の成果及び今後の課題

本事業は、子どもにとって博物館はどのような場であるべきか、どのような役割を果たすべきかを考えるために、県内の博物館や県立博物館のサポートスタッフ等とともに、博物館と子どもをつなぐ試行的取組を行うことにより、子どもが博物館の活動に主体的に参加できる仕組みづくりや、子どもの主体的な活動の場となる博物館環境の整備をめざすとともに、県内博物館とのネットワークづくりを進めるために実施したものである。

この取組により、子どもを対象とするプログラム等のあり方や手法について、また博物館活動への子どもの参加や子どもたちの主体的な学びの場としての博物館のあり方についての見識を深めることができた。とりわけ、参加した子どもたちの当日の様子、アンケート回答などから、子どもたちが望む博物館とは、学びの場であるとともに、友だちや大人とともに楽しめる場、友だちのできる場であることを改めて認識することができた。

また、これらの取組を県内の博物館関係者や博物館サポートスタッフなどと協働して行ったことにより、認識を共有するとともに交流を広げることができた。

今後、この事業で得られた成果を参加者だけにとどめることなく、効果的に発信することにより、博物館ネットワークづくりへとつなげていきたい。